

野村智清(東京大学)

自分自身の誕生日というありふれた事柄にはじまって、東京は日本の首都であるという地理的な事柄、イースター蜂起は 1916 年におこったという歴史的な事柄、さらに血液は体内で循環しているという科学的な事柄まで日常的に知識と呼ばれている事柄のほとんどをわたしたちは証言によって獲得しているとされる¹。そうであるならば知識を哲学的に考察する際に、その対象から証言による知識の獲得を外すことは考えられない。

証言による知識の獲得を対象として含む哲学的考察は、一般に証言論と呼ばれている。本発表ではこれらのことを鑑みて、バークリの証言論を明らかにすることを試みる。本発表でバークリの証言論を主題的に採り上げる理由は以下の二つである。

第一の理由として、バークリの証言論が証言論の歴史における空白地帯となっていることを挙げることができる。証言による知識の獲得について考えた場合には、証言によって知識を獲得することができるとする立場と証言によっては知識を獲得できないとする立場の二つを考えることができる。また後者は多くの証言論で還元主義と非還元主義に分類される。このように証言による知識の獲得について大きく区分した場合に、バークリに先行するロックと後続するヒュームやリードには、証言論の歴史において既に定位置が与えられている。ロックは証言によって厳密には知識は伝達されないという立場を採ったとされている²。またヒュームは還元主義を採り、リードは反還元主義を採ったとされている³。これに対して、バークリは証言論の歴史において空白地帯となっている。このことはバークリの証言論に向かう十分な理由となるだろう。

そして第二の理由として、バークリ哲学内部で証言論が重要な役割を担っていることを挙げることができる。第一の理由も示唆するように、バークリの証言論はこれまでほとんど注目を集めることがなかった。しかし、このことはそれがバークリ哲学内部で重要でないことを意味してはいない。むしろ証言論は、バークリ哲学の中核に位置するといっても過言ではないと本発表では考える。このことを概観するためには、バークリ哲学で重要な二人の人物に登場を願わなくてはならない。その一人はモリニュー状況の人 the Molynux Man であり⁴、もう一人は素朴な人 the vulgar である。それぞれの登場人物について順にみていくことにしよう。『視覚論弁明』でバークリは 1728 年に発表されたチェセルデンの報告に触れながら、自身の知覚の異質性を巡る理論が報告内のモリニュー状況の人の発言によって「確認された」と述べている。(『視覚論弁明』35 節)このことはモリニュー状況の人の証言によって知覚の異質性を巡る知識を獲得されたことを意味している。『ハイラスとフィロナスの三つの対話』でバークリは自身の代弁者であるフィロナスの口を通して、非物質論が正しいか否かは常識をもった素朴な人びとの判断に委ねられるべきであると述べている。Berkeley(1948-1957), Vol. 2, p.237.このような発言は『ハイラスとフィロナスの三つの対話』に限られず、『哲学的評注』や『人知原理論』でも散見される。これは素朴な人が非物質論を正しいと証言すれば非物質論についての知識が獲得されることを意味している。モリニュー状況の人と素朴な人が関わる知覚の異質性と非物質論はバークリ哲学の中核を成している。このことからバークリ哲学において証言論はその中核を担っていると考えること

ができる。そうであるとすれば、バークリの証言論を考察の俎上に載せる十分な理由となる。

第一と第二の理由から本発表では、バークリの証言論を主題的に採り上げる。本発表ではこの主題を以下のように展開することを試みる。

本発表が主に扱うテキストは『アルシフロン』である。『アルシフロン』第七対話では、「恩寵」や「三位一体」という言葉は対応する観念をもたないが有意味であると主張されている。Berman はこれをバークリが意味の情緒説を採った結果であると解釈する。この解釈は 1980 年以降支配的であったが 2000 年代に入って Williford や Jakapi によって批判されている。批判の主旨は、仮にバークリが意味の情緒説を採っているならば、例えば三位一体を巡る言明は真理値をもたないことになってしまう。しかし、敬虔なキリスト者であるバークリにとって三位一体を巡る言明は真でなければならぬので、バークリは意味の情緒説を少なくとも現代的な意味では採られていない。

本発表ではこの批判を受け止めつつ、『アルシフロン』第六対話に注目して、三位一体を巡る言明はそれを真であると証言する者の権威によって真と同意されるというバークリの証言論を明らかにしていく。

<参考文献>

- Atherton (1960). *Berkeley's Revolution in Vision*, Cornell University Press.
- Berkeley (1948-1957). *The Works of George Berkeley, Bishop of Cloyne*. edited by Luce, A. A. and Jessop, T. E. Thomas Nelson and Sons.
- Coady (1973). *Testimony and Observation*, *American Philosophical Quarterly* 10,149-55.
- Fields,(2011). *Berkeley: Ideas, Immaterialism, and Objective Presence*. Lexington Books.
- Lackey(2008). *Learning from Words*. Oxford: Oxford University Press.
- Schmitt(1987).*Justification, Sociality, and Autonomy*. *Synthese* 73,43-85.
- Shieber(2009). *Locke on testimony: A reexamination*. *History of Philosophy Quarterly* 26 (1). 21-41.
- O'Brien(2006). *Introduction to the Epistemology of Testimony*. *Philosophica* 78, 5-11
- Pritchard.(2004). *The Epistemology of Testimony*, *Philosophical Studies*, 14. 326-348.

¹ 例えば Coady(1973), p.151.や Lackey(2008), p.1.等を参照。

² Schmitt(1987), p.44.や及び O'Brien(2006), p.5.等を参照。しかし、これらの解釈は Shieber,(2009), pp.22-4.でも指摘されているようにロックの知識をもつとも厳密に採った場合に可能となる。

³ 例えば Pritchard(2004) p.328.を参照。

⁴ 昨今この「モリニュー状況の人」という表記は散見される。例えば Atherton(1990),p.90.や Fields(2011).の「モリニュー状況の人」と題された第四章を参照。この表現はいわゆるモリニュー問題の登場人物に加えて『視覚新論』に登場するそのさまざまなヴァリアントを勘案している。